

「メディアとスポーツ」が残したもの

沼澤 秀雄

1. はじめに

スポーツ健康科学教育研究室では全学共通カリキュラム総合Bの実施により、以前には「保健体育講義」としてのみ行っていた講義科目を「メディアとスポーツ」というタイトルで他大学には例をみないユニークな形態によって展開することができた。開講して4年間を振り返り、担当講師が学外に向けて発信した文章とTBSの番組で紹介されたコラム、さらに学生による授業評価の結果によって、この授業の意義と学生への影響、今後の課題などについて考えてみたい。また、最後に学生主導による授業実施を試みた感想について、受講生の文章を付け加えて報告する。

2. 各講師の著書から

立教大学での『メディアとスポーツ』
「現代スポーツ批評」創文企画（服部孝章）私の勤務する立教大学は、1997年に、それまでの『一般教育』を『全学共通カリキュラム』と名称もその内容も大幅に変えた。所属学部や学年に関係なく全学生に開かれたこの『全学

共通カリキュラム』。その一つに『メディアとスポーツ』という科目がある。

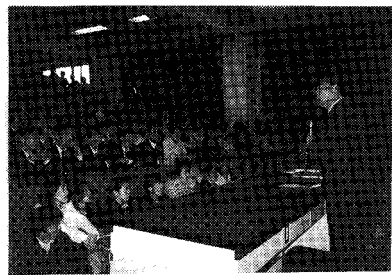
スポーツ健康科学教育研究室の沼澤秀雄先生がコーディネーターになり、豊富なスポーツ実況経験を持ち現在NHK解説委員であり横浜国際競技場の場長も務める西田善夫さん、スポーツライターの青島健太さん、そして私の4人が毎講義に参加している。時には現役選手などのゲストを交えて授業が進められている。1997年度は前期一コマであったが、翌年からは前期後期一コマずつ開講され、受講者は毎期700名を越える人気科目になっている。講義は毎回、各講師がアップ・トゥ・デイトな話題とその日の主要課題について、それぞれの立場から15分程度の時間で話し、学生の質問を受けるといった段取りで進められている。

『メディアとスポーツ』という科目名に、関心のある事項が2つあることで興味を引かれる受講生が少なくないようで、この2つの関係が、今ひとつわからないといった声も、講義開始早々では少なくない。しかし、この2つは密接に関連しあいながら、特にメディアがスポーツのあり方に大きな影響

を持ち始めている昨今、担当者としてあるいは、他の三方のお話を聞いたり、ゲストの体験談や物の見方を聞く立場にたった参加者としても、興味の尽きない講義だ。また社会学部社会学科ではスポーツライターの谷口源太郎さんが担当する『スポーツジャーナリズム』という特別講義を3年前から設置している。

この『スポーツ評論』の編集を担当し、創文企画から多数の関係書籍とりわけ『スポーツ文化論シリーズ』の編者である中村敏雄さんが、そのスポーツ文化論シリーズ第4巻『スポーツメディアの見方、考え方』の巻頭に「現代のスポーツ・メディアは、国民がスポーツについて深く考えることを阻害しているということ以上に、国民がスポーツ・ライターや記者達以上にスポーツについて深く考え、スポーツへの批判を強めていくことを『恐れている』ように思われる。それはスポーツについて『国民とともに考える』という発想を欠き、国民と共にスポーツを発展させていくという考え方をしないからである」と記している。この視点こそが、『メディアとスポーツ』という科目に必要不可欠だ。感動、幻滅といったスポーツへの感情だけではなく、冷静に客観的に事象としてそれぞれのスポーツを捉え、分析していく。そこに、メディアにとってのスポーツ、同時にスポーツにとってのメディアの理想的なあり方が見えるはずだ。

運動部員よ、学生のなかへ「スポーツ



が面白くなる見方」講談社（西田善夫）

—前略— 立教大学の授業では、社会学者の服部孝章さん、スポーツキャスターの青島健太さん、そして私の3人がひとつのテーマについて勝手に20分ずつ話し、それを体育学の沼澤秀雄助教授がコーディネーターとして整理してくれて、残りの30分が質疑応答。人気授業のひとつになっているが、私自身、先生方の話が面白いので毎回楽しみにしている。そこで私は、たとえば、こんなことをやる。「野球部員はいるか?」「ハイ」「名乗ってみろ」「1年、荒木です」「高校はどこだ」「日大藤沢高校です」「選抜に出た日大藤沢か、そうか、よく来た。で、甲子園でヒット打ったのか?」「ヒットは立教で打ちます」400人の学生が、ワーッと沸く。こんな調子で授業が始まる。そして数週間後、立教は新人戦で優勝し、この荒木選手も2番センターでフル出場し、今度はそれを話題にする。「荒木くんは優勝戦まで3試合にフル出場した。みんなで拍手を送ろう」すでに荒木くんを知っている教室の学生は、一斉に拍手してくれる。荒木選手は最後列で立ち上がって一礼する。「全試合

出場は大したものだ。ヒットは1軍で打てばいい」新人戦で無安打だったことに気がついた学生が、また沸く。「今度は、ほかの部員も連れてこいよ」翌週、荒木くんは、早速もうひとりの部員を連れてきた。こんなことがあって以来、運動部員も自分から名乗るようになって、「アメリカンフットボールの部員減少」などをテーマにし討議したりもする。少なくとも私の教室の学生にとっては、運動部員が非常に身近な存在になった。こうしてでも運動部員が一般学生のなかに入ることが、まず第一歩だと思う。「いまの学生にはいろいろ遊ぶことがあるから、スポーツに関心がなくなるのも無理はない」などという人もいるが、遊びは私の学生時代からあった。そんな諦めよりも、学生同士の結びつきによって、スポーツや運動部を身近に感じてもらう。そうすれば、球場や競技場に応援にきてくれる学生も増えるに違いない。「メディアとスポーツ」という立教の授業には、テニスの沢松奈生子さんも非常勤講師として参加することになった。ほかの大学でもこんな授業が開講されれば、きっと大学のスポーツは、もっと元気になるのではないだろうか。「運動部員よ、自分達だけの世界に閉じこもらずに、一般学生と積極的に交流しよう！」そう願って、週一回の「メディアとスポーツ」の授業に出ている。—スポーツ十番勝負—青島健太のスポーツコラム（青島健太）1997年4月放送 不肖、青島先週から立教大学の非

常勤講師として「メディアとスポーツ」という講座を担当することになりました。—中略—現在のスポーツを取り囲む環境、このことを考える時にメディアとの関係を抜きに語ることはできません。競技としてのスポーツ、それをメディアが伝えることによって、実態としてのスポーツの周辺に、ある種のイメージが出来上がる。時にはそのイメージがある選手をスーパースターにもしますし、時にはある選手を試合に負けた原因にもしてしまいます。実態としてのスポーツとメディアによって創られるイメージ、その総体が現在のスポーツということになるわけですが、この番組も私達も実はそうしたある種のイメージ創りに一役かっているというわけです。スポーツを難しく大学の勉強っぽく言うところんな言い方になるわけですがけれども、私の考えるスポーツとはそんなに難しいものではありません。スポーツとはとにかく見るよりも語るよりもまずは自分の体を使ってやるもの。私が体験的に思うのはスポーツをすることは大学の授業なんか休みたくなるほど面白いということでもあります。このコラムを立教の学生



が見ていないことを祈ります。

各講師の先生方に授業を紹介していただいたが、どの文章からもスポーツの対する親愛と畏敬の気持ちが表れているように思う。スポーツはこれからメディアとともに進化していくであろうとおもわれるが、生活に根ざした人類の文化として継承されてほしい。

この授業では前述の講師のほかに、陸上競技のオリンピック選手である山崎一彦選手、女子マラソンの鯉川なつえさん、ボブスレーの井上将憲選手、テニスの沢松奈生子さん、シンクロナイズドスイミングの小谷実可子さん、本学から長野オリンピックに出場した佐藤あゆみさんといったトップアスリートに講師(佐藤あゆみさんは受講生)として貴重なお話を聞かせていただいた。また、巨人軍球団代表の山室寛之さん、東京ヴェルディ社長の坂田信久さん、サッカー協会所属の田嶋幸三さん、元スポーツキャスター長田渚左さん(ゲスト)、筑波大学の嵯峨寿先生といった第一線のスポーツ現場で活躍されている方にお話をいただいた。この他に2人のについてはご都合により来校が叶わなかったが、快く講師を引き受けてくださり、学生にとっても大学にとっても非常にありがたいことでこの場を借りてお礼を申し上げたい。

3. 学生の授業評価について

この授業ではいち早くFD (Faculty Development) の一環として、学生に

よる授業評価を試みた。東京都立大学の授業評価に用いたアンケート項目を参考にして、10項目の質問を受講生に答えてもらった。回答は、「全くそう思う」：5、「そう思う」：4、「どちらともいえない」：3、「そう思わない」：2、「全くそう思わない」：1の5段階評価とした。質問は授業の運営について、授業の内容について、学生の取り組みについての内容であった。このアンケートの結果と授業終了時に提出したレポートの授業の感想に記載されていた内容から、学生評価について検討を行なった。

「授業の時間配分は適切であったか」に対しては、そう思うが全体の41%で、平均は3.64、「資料の提示のしかたはうまくいっていたか」については、どちらともいえないが最も多く38.7%で平均3.23となった。このことは約20分程度の時間でひとりの講師が話し、その後質疑応答を行なうスタイルを評価した学生と1人の講師にその時間のテーマについてじっくりと時間をかけて話してほしいという意見に別れたためであろうと思われる。「この授業から自分の期待していたものが得られたか」については、そう思う、あるいは全くそう思うと答えた学生が73.9%であり、平均でも3.90と高い評価となった。「大学生としてふさわしい授業であったか」についてはそう思う、あるいは全くそう思うと答えた学生が67.8%であり、平均では3.78と比較的高い評価となった。また、「この授業を

他の学生に薦めたいと思うか」については、全くそう思うが57.9%と半数以上の学生が高く評価しており、平均4.34を示した。この3項目の質問から、この授業についての関心、内容についての満足度も全体的に高かったことがわかる。課題レポートの感想を見ても、いままでの大学の授業になかった形式と内容であったという意見が多数あり、その要因として、メディアに関わる分野において活躍している講師陣を毎回授業に招いていること、スポーツを多角的に捉えており、従来のスポーツに対する印象や考え方に変化が生まれたという点、実際のフィールドで活躍している選手の生の声がきけたということがあげられるだろう。また一方で、スポーツやマスコミ、あるいはメディアに関する専門的な話になると内容がわからないという意見や、高名や講師に対して、常識的なことはきけないということがあり、手をあげて質問できないといった感想もあった。「わたしはこの授業において真剣に学ぼうとした」、「この授業期間を通じて常に出席しよう」と心掛けた」についてはそう思う、あるいは全くそう思うと答えた学生がそれぞれ82.0%、84.3%を示しており、平均でもそれぞれ4.19、4.42と非常に高い数値を示した。「学生の人数と教室の大きさは適切であったか」については、いずれもどちらともいえないが31.4%、27.6%と最も多く、平均では2.54、2.91であった。「講師とのコミュニケーションがとれたか」では、

そう思わないが最も多く37.2%、平均ポイント2.50という結果であった。講師とのコミュニケーションの機会は授業時の質問時間か授業終了時に個人的に質問を行なうのみであり、これらは明らかに大規模科目の弊害といえよう。

このデータは2年目終了時に立教大学の紀要に授業研究として報告した。そして、大人数科目を解消してほしいと要求し、翌年前期、後期の2回開講としたものの、受講生は減少することなく、特に前期については2000年度1400人を超える履修者を担当することとなってしまった。この問題は、2001年度は池袋開講を取りやめ、新座に移すことで解決させることとなってしまったが、科目の増減や入れ替えについては本来、授業そのものの、具体的にいえば授業の内容や学生の反応などの検討があつてしかるべきで、それを行わず、担当者にたいするインタビューのみで今後の運営を図っていくことは総合Bの進化といえるかどうか私は疑問に思う。科目数が23に増え、心配いらないのではという声があるかもしれないが、人数制限の問題は必ずいつかでてくるのではないだろうか。

4. 学生の声

今年度の最後の授業で学生が問題を提起し、講師に意見を述べるという試みをおこなった。男子学生2人に司会をお願いしたのだが、彼らはこの授業に関する「振り返り」を後日残してくれた。学生側から見たこの授業に関し

でのメッセージがいくつか挙げられていたのでここに紹介したい。

社会学部社会学科 稲葉俊之 小暮秀和「オレ、～～さんの話はわかるけど～～さんの話は何か引っかかるんだよね。」、「メディアとスポーツ」の講座をとっている仲間内で、こんな会話が出てきた。理由は簡単だった。通常の講座と違い講師が複数、そしてその講義はそれぞれ話し方にも内容にも特徴があるからだ。しかしこの会話が出てから、なぜ私たちがそう感じたのかを確かめようとして講義の内容をしっかりと聞き、吟味してみた。講師の方々はメディア・スポーツ、スポーツ社会学などそれぞれの世界での経験と知識をもとに講義を行うため、受講生にとっては興味深く、またとても説得力のあるものだった。ただ内容を注意して聞いてみると、それぞれ講義が違うテーマであるためわかりにくい。やはり立場も専門領域も違う講師の方々は主義、主張、意見も異なっており、その中には私たちがその講義に同調できるものもあれば、できないものもある。それにも関わらず、それらの主義、主張をお互いにつぶせることなく、受講生が淡々と講義を聞く分にはそれが表面に出てこないのだ。そのような授業形態で果たして本当に「メディアとスポーツ」の本質的な問題点が受講生に見えてくるだろうか。仲間内でそう話し合った結果、私たち二人が授業を提案をすることにした。私たちの意思、そして何をしたいかを伝えると沼澤先生な

らびに講師の方々は快く承知してくれた。授業自体は困難の連続で、とても大成功といえるようなものではなかった。つたない進行、まとまらない結論、レジュメの不備。「テーマはいいが、範囲が広範すぎる」と批判される始末。極めつけには、私たちと講師の方の一人とに、物別れに近い討論があった。自分たちとしては納得ができないまま壇上を降りると友人たち、さらには討論をした方を含めた講師の方々に「なかなか良かったよ」などと、私たちが思ってもいかなかった評価を受けることができた。それらは私たちにとって驚きに値するものだったが、後日、沼澤先生に了承を得て見せていただいた授業後の受講生のリアクションペーパーも含めて考えてみると、講義をしていただく講師の方々の意見に対して自分たちの意見を述べる、この事自体が受講生にとって、ほとんど初めて目にする光景だったというのが関係しているようだった。大学の講座において、ほとんどの講義は一人の講師によって行われる。もちろんその講師の先生は、受講生よりも明らかにその学問における知識、または経験において勝っている。そのため受講生はその人の講義による意見、考えというものを何の抵抗も無く吸収してしまう傾向がある、と私たちは考えている。本当にその講義を自分のものにするという事は、その内容を他の考えも交えて自分の中で考え、咀嚼し、その結果自分の考えを持つ事ではないだろうか。私たちは「メ

ディアとスポーツ」の授業で、それがある程度できたように感じた。だがその原因を追求してみると、それは「メディアとスポーツ」の講義形態にあったと思う。複数の講師の存在によって、その差異が明らかになり、自分たちで考える事ができた。そして私たちは授業に問題を感じ、自分たちで授業を変えた。そう考えると「メディアとスポーツ」と私たちというのは、相互に働きかけ高め合っていたような気がする。そして大学には講師だけでなく、もっともっと学生の発言できる、または発言しやすい場（授業）が必要だという事を感じ、その場を与えてくれた講師の方々に改めて感謝の意をここに表したい。このような民主主義的な講座が増える事を期待したい。



5. さいごに

この授業については、日本体育学会50回記念大会において初代全カリ部長であった寺崎桜美林大学学長より、全学共通カリキュラムの実施に関する報告の中で紹介された。また、大学体育連合関東支部研修会「大学体育講義における映像教材の活用と開発」におい

て、著者が「大学における体育講義の理念と実際」というテーマで発表した。さらに関連した企画として、対談青島健太氏・ヨーコ・ゼッターランド氏「スポーツと共に—私の選択」、長野冬季オリンピック佐藤あゆみ写真展を開催した。殺人的なレポート読みや採点も含めてこれらのことをやる事ができたのも全カリ運営委員会の理解と服部先生をはじめ多くの先生方のご協力があったためである。深く感謝申し上げたい。受講生の中にはメディアやスポーツの業界で仕事に就きたい学生が多く、実際、報告を受けているだけでも10名程度がテレビ、ラジオなどのいくつかの放送局や出版会社に就職した。是非本物のスポーツを伝える仕事をしてほしいと思う。この授業がスポーツへの理解と今日のメディア事情について考えるヒントを残せたとしたら、こんなにうれしいことはない。

（ぬまざわ ひでお 本学コミュニティ福祉学部助教授、全カリ運営センタースポーツ健康科学教育研究室 1997年～2001年度総合B群「メディアとスポーツ」コーディネーター）